シンポジウム 震災復興と環境保護

～福島県松川浦の事例から～

2014年11月24日（月・祝） 参加費無料
13:30～16:30
台東区生涯学習センター 301研修室
つくばエクスプレス線浅草駅徒歩約5分、地下鉄日比谷線入谷駅徒歩約8分

震災から3年半、大きな撹乱だったにも関わらず、松川浦（福島県相馬市）では、生物の種類はほぼ戻ってきている状態です。被災地の海岸線の復旧工事も本格的になり、津波で壊滅した松林のあった砂州の一部を、かつてあった塩性湿地に戻していこうという取り組みが進んでいます。これは他の被災地にはない動きです。

一方、「いち早い復興」や「安全」の名の下に多くのものも消えていっています。私たちは次世代に何を残していくべきか、復興の現場の話から皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

主なプログラム

アカテガニ：環境公園の土手で元気に暮らしている。

- **東日本大震災が与えた植生と植物相への影響と復旧事業における湿地再生の取り組み**
  黒沢 高秀　福島大学教授（植物）
- **津波が松川浦の干潟生物に及ぼした影響とその後の回復状況**
  鈴木 孝男　東北大学大学院助教（底生生物）
- **松川浦の復興の中での環境保護**
  新妻 香織　はぜっ子倶楽部代表
- **これからの復興について考えるフリーディスカッション**

プロフィール

ウミミドリ：津波の撹乱で40年ぶりに松川浦に現れた植物。

黒沢 高秀（くろさわ たかひで）
1965年東京都葛飾区生まれ、千葉県船橋市育ち。東北大学大学院理学研究科修了、博士（理学）。福島大学教育学部助教授を経て、2013年より同大学共生システム理工学類教授。植物分類学の特にトウダイグサ科を専門とする。福島では地域の植物相やその保全にも携わり、震災後は津波跡地や福島第一原発事故による避難区域等の生物多様性の調査やこれらの保全にも奔走している。

鈴木 孝男（すずき たかお）
秋田県出身。弘前大学を経て、東北大学へ。趣味は山登りだが、仕事は海辺。これまで、干潟、海草藻場、マングローブ、サンゴ礁などで調査研究を行った。東北地方の干潟については、東日本大震災の直前まで各地で調査を行っており、震災後には、干潟やそこに棲む生きものたちがどうなったのか、どのように回復してきているのかについて、モニタリングを続けている。

アサリ：アサリはだいぶ多くなってきたようだ。

新妻 香織（にいつま かおり）
1960年、福島県生まれ。松川浦を遊び場に育つ。JTB出版事業局で月刊「旅」や「るるぶ」の編集に携わるが、30歳で職を辞し5年間アフリカへ。帰国後、故郷に戻り、松川浦の魅力を再認識するとともに、その環境を守っていくため2000年「はぜっ子倶楽部」を創設。震災後は津波で壊滅した故郷のために、相馬市議会議員になって復興に奔走する日々。

クロマツ植林を襲った津波の跡：森林生植物は壊滅した。

ハママツナとハマサジ：塩性湿地生絶滅危惧植物の大群落がクロマツ植林跡に出現した。

ハマエンドウ：砂浜の植物は概して良好に生育している。

海岸防災林復旧事業：保全との両立を模索しながら進んでいる。

アマモ場：震災後に大打撃を受けたアマモは近年回復が見られる。

主催：ラムサール・ネットワーク日本／はぜっ子倶楽部
お問い合わせ：TEL/FAX 03-3834-6566　Eメール info@ramnet-j.org

※このシンポジウムはラムサール・ネットワーク日本のエコトーンプロジェクトの一環として行うものです。

（背景写真）タマシキゴカイの糞：タマシキゴカイは泥を食べた後に干潟にモンブランケーキのような糞塊を出す。